

強制採尿（身体への侵入・令状の種類）

ゼロから司法試験 復習ノート / ゼロから刑事訴訟法#18 / 動画: <https://youtu.be/Bg56vNglqig>

第2章 捜査 ⑬／動画の内容を見返し用にまとめたものです（動画には含みません）。

1. 前提——身体への侵入と3つの令状〔短答・論文共通〕

「体を調べる」といっても侵害の段階はさまざまで、令状も対応して分かります。①着衣のまま外から探るのは捜索であり、捜索差押許可状によります（侵害は比較的軽い）。②裸にして傷跡を見る・体内を目視するといった行為は検証にあたり、身体検査令状（刑訴218条1項後段）で行います。③体に針を刺して血を採るような侵襲は鑑定処分（医学的処置）であり、鑑定処分許可状によります。侵害の程度で区別するのが通説、行為の性質で区別するのが判例ですが、強制採尿はこの枠を超

える独自の処理（条件付捜索差押許可状）になります。

2. 第1の問い——そもそも許されるか（可否）〔論文〕

強制採尿は身体への侵入と屈辱感を伴う重大な人権侵害ですが、絶対禁止ではありません（身体検査でも同程度の侵害がありうるからです）。判例は真ん中に線を引き、真にやむを得ない場合の最終手段としてのみ許容します。考慮要素は、①事件の重大性、②嫌疑の存在、③証拠の重要性とその取得の必要性、④適当な代替手段の不存在の4つで、これに身体の安全と人格の保護のための十分な配慮が加わります。第6回でやった比例原則（必要性＝アクセル／侵害＝ブレーキ）の、最も重い場面版だと捉えてください。

判例（可否）

強制採尿は身体への侵入・屈辱感を伴うが、強制処分として絶対に許されないわけではなく、被疑事件の重大性、嫌疑の存在、当該証拠の重要性とその取得の必要性、適当な代替手段の不存在等の事情に照らし、捜査上真にやむを得ないと認められる場合には、最終的手段として、被疑者の身体の安全とその人格の保護のための十分な配慮の下に、これを行うことが許される。

→ 最決昭55・10・23（第一小法廷決定・刑集34巻5号300頁）。覚醒剤使用の嫌疑で採尿を拒否した被疑者に、カテーテルを用いて強制的に尿を採取した事案。可否（許されるか）の規範を定立した。

図：可否（許されるか）の規範。

3. 本丸——どの令状か（性質×直接強制の2目盛り）〔論文〕

令状選びは、2つの目盛りを両方満たすものを探す作業です（工具箱から正しい工具を選ぶイメージ）。目盛りAは処分の性質（探す/見る/分析）、目盛りBは抵抗されても無理やりできるか＝直接強制が届くか、です。強制採尿は本人が暴れる前提なので、力が届かない令状は実戦で使えません（Bが効いてきます）。

観点	鑑定処分許可状説	鑑定処分許可状+身体検査令状 併用説	条件付捜索差押許可状説（判例・実務）
性質（目盛りA）	○ 体内の医学的行為＝分析に近い	○ 同左	○ 尿＝体内の証拠物＝捜索・差押え
直接強制（目盛りB）	× 鑑定受託者に権限なし（225④が172不準用）	○ 身体検査令状で222①→139が届く	○ 捜索差押えとして届く
人権配慮	—	身体検査令状側で対応	○ 「医師の方法」の条件で補う（218⑨）
評価/批判	実効性なし＝暴れたら採れない	令状2枚は便宜的すぎる	2目盛りを一枚で満たす＝採用

強制採尿の令状——3説の採点（性質×直接強制の2目盛り）

観点	鑑定処分許可状説	鑑定処分許可状+身体検査令状 併用説	条件付捜索差押許可状説（判例・実務）
目盛りA=性質	○ 体内の医学的行為＝分析に近い	○ 同左（鑑定処分が基礎）	○ 尿＝体内の証拠物＝捜索・差押え
目盛りB=直接強制が届くか	× 鑑定受託者に権限なし（172不準用）	○ 身体検査令状で222①→139が届く	○ 捜索差押えとして届く
人権への配慮	—	身体検査令状側で対応	○ 「医師の方法」の条件で補う（218⑥）
評価/批判	実効性なし＝暴れたら採れない	令状2枚は便宜的すぎる	2目盛りを一枚で満たす＝採用

図：性質×直接強制の2目盛りで3説を比較した板書。

4. なぜ条件付捜索差押許可状か

〔論文〕

判例は、尿を「体内にある証拠物（モノ）」と捉え直します（財布を飲み込んだ犯人の財布も“押収すべき物”のままであるのと同じ発想です）。そう捉えれば性質は捜索・差押えであり、直接強制も届きます。残る人権配慮は、令状の条件で補えばよいことになります。最

決昭55・10・23は、体内の尿を犯罪の証拠物として強制採取する行為は捜索・差押えの性質を有するから捜索差押令状によるとし、その令状には「医師をして医学的に相当と認められる方法により行わせなければならない旨の条件の記載が不可欠」だとしました。条件の根拠は刑訴218条9項です。

判例（令状の種類）

体内に存在する尿を犯罪の証拠物として強制的に採取する行為は、捜索・差押えの性質を有するものとみるべきであるから、捜査機関がこれを実施するには捜索差押令状を必要とする。ただし、右令状には、強制採尿は医師をして医学的に相当と認められる方法により行わせなければならない旨の条件の記載が不可欠である。

→ 最決昭55・10・23。尿は体内にあっても“証拠物（物）”＝捜索・差押えの性質と捉え、人権配慮として218条9項の「条件」を活用した（＝条件付捜索差押許可状）。鑑定処分許可状説は鑑定受託者に直接強制権限がなく実効性で劣る。

図：令状の種類（条件付捜索差押許可状）の規範。

【条文】 刑事訴訟法218条9項 裁判官は、身体検査に関し、相当と認める条件を付

することができる。

条文 刑事訴訟法218条9項（身体の検査に関する条件）

裁判官は、**身体の検査に関し、適当と認める条件を付することができる。**

（令和7年の法改正で項ずれがあり、古い文献にある「218条6項」は現行の9項にあたります。）

検査令状は検証の一種で、222条1項が139条（直接強制）を準用するので、力が届きます。

5. 直接強制のリレー——鑑定処分説の弱点〔短答・論文共通〕

なぜ鑑定処分許可状説では足りないのか。直接強制が届くかどうかは分かれ目です。身体

【条文】刑事訴訟法139条 裁判所は、身体の検査を拒む者を過料に処し、又はこれに刑を科しても、その効果がないと認めるときは、そのまま、**身体の検査を行うことができる。**

条文 刑事訴訟法139条（身体の検査の直接強制）

裁判所は、**身体の検査を拒む者を過料に処し、又はこれに刑を科しても、その効果がないと認めるときは、そのまま、身体の検査を行うことができる。**

ところが鑑定受託者（225条4項）は172条を準用せず、139条にもつながりません＝直接強制ができません。裁判所が選ぶ「鑑定人」は172条経由で届きますが、捜査機関が依頼する「鑑定受託者」は届かないのです。だから鑑定処分許可状説は、実効性の点で負けます（暴れたら採れません）。

6. 連行——病院まで連れて行けるか 〔短答・論文共通〕

強制採尿は危険を伴うので、設備のある病院等で行う必要があります。逮捕・勾留済みな

ら拘束の効力で当然連行できますが、問題は身柄不拘束の被疑者です。最決平6・9・16は、任意同行が事実上不可能なら、強制採尿令状の効力として、採尿に適する最寄りの場所まで連行でき、必要最小限度の有形力も行使できるとしました。令状に連行先を記載することも許されます（望ましい）。逮捕状は不要で、連行は令状にひつついた付随的処分です（採尿という本番は病院という会場がないと開けないので、令状の効力に含めて読むわけです）。

判例（連行）

身柄を拘束されていない被疑者を採尿場所へ任意に同行することが事実上不可能であると認められる場合には、強制採尿令状の効力として、採尿に適する最寄りの場所まで被疑者を連行することができ、その際、必要最小限度の有形力を行使することができる。

→ 最決平6・9・16（第三小法廷決定・刑集48巻6号420頁）。連行は令状にひつついた付随的処分＝逮捕状は不要（裁判官は連行の要否も織り込んで令状を発付したと解される）。令状に連行すべき場所を記載することも許される（望ましい）。逮捕・勾留済みなら拘束の効力で当然連行可。

図：連行（採尿適地まで連行＋必要最小限度の有形力・逮捕状不要）の規範。

短答ひっかけ

- 強制採尿の令状は**搜索差押許可状**（鑑定処分許可状でも身体検査令状でもない）。判例＝最決昭55・10・23。
- 鑑定処分許可状説の弱点＝**鑑定受託者に直接強制の権限がない**（225④が172を準用しないため139条が及ばない）。
- 身柄不拘束の連行に**逮捕状は不要**（強制採尿令状の効力＝付随的処分・最寄りの採尿適地まで・必要最小限度の有形力）。最決平6・9・16。

- 強制採血は尿と結論が一義でない（血液は“身体の一部”ゆえ議論が変わる＝鑑定処分許可状＋身体検査令状の併用説が有力／詳細は証拠法回へ送り）。
- 可否の判例年月日は**昭和55年10月23日**（平成3年7月16日ではない）。

論文の型 | 強制採尿の可否と令状の種類

- 【コア規範】（逐語暗記＝太字キーワード）強制採尿は身体への侵入・屈辱感を伴うが絶対に許されないわけではなく、**被疑事件**

の重大性、嫌疑の存在、証拠の重要性と取得の必要性、適当な代替手段の不存在等に照らし、捜査上真にやむを得ないと認められる場合に、最終的手段として、被疑者の身体の安全と人格の保護のための十分な配慮の下に許容される〔最決昭55・10・23〕。体内の尿を犯罪の証拠物として強制的に採取する行為は**搜索・差押えの性質**を有するから、「医師をして医学的に相当と認められる方法により行わせなければならない」旨の条件を付した**搜索差押許可状**による（218条9項）。

- 【復元キー】 ①可否＝絶対禁止ではない（要件を満たせば可） → ②要件＝重大性・嫌疑・証拠の重要性と必要性・代替手段なし→真にやむを得ない最終手段＋身体の安全と人格保護への配慮 → ③令状＝尿は体内の証拠物＝搜索・差押えの性質→条件付搜索差押許可状（218VI） → ④鑑定処分許可状説は直接強制不可で実効性を欠

くから採らない／連行は令状の効力（平6・9・16）。

- 【フル論証】 強制採尿は身体への侵入・屈辱感を伴うが、強制処分として絶対に許されないわけではなく、被疑事件の重大性・嫌疑の存在・当該証拠の重要性とその取得の必要性・適当な代替手段の不存在等に照らし、捜査上真にやむを得ないと認められる場合には、最終的手段として、被疑者の身体の安全とその人格の保護のための十分な配慮の下に許容される（最決昭55・10・23）。体内の尿を犯罪の証拠物として強制的に採取する行為は**搜索・差押えの性質**を有するから、**搜索差押許可状**によるべきであり、これに「医師をして医学的に相当と認められる方法により行わせなければならない」旨の条件を付して行う（218条9項）。鑑定処分許可状説は鑑定受託者に直接強制の権限がなく実効性を欠くから採らない。

★ コア規範（逐語で覚えるのはここだけ） | 強制採尿の可否と令状の種類

強制採尿は身体への侵入・屈辱感を伴うが絶対に許されないわけではなく、被疑事件の重大性、嫌疑の存在、証拠の重要性と取得の必要性、適当な代替手段の不存在等に照らし、捜査上真にやむを得ないと認められる場合に、最終的手段として、被疑者の身体の安全と人格の保護のための十分な配慮の下に許容される〔最決昭55・10・23〕。体内の尿を犯罪の証拠物として強制的に採取する行為は**搜索・差押えの性質**を有するから、「医師をして医学的に相当と認められる方法により行わせなければならない」旨の条件を付した**搜索差押許可状**による（218条9項）。

最決昭55・10・23（可否・令状の種類）／最決平6・9・16（採尿のための連行）

復元キー（理解した趣旨から答案を再構成する）

- ① 可否＝絶対禁止ではない（強制処分として要件を満たせば許される）
- ② 要件＝重大性・嫌疑・証拠の重要性と必要性・代替手段なし → 真にやむを得ない最終手段＋身体の安全と人格保護への配慮
- ③ 令状＝尿は体内の証拠物＝搜索・差押えの性質 → 条件付搜索差押許可状（218条9項）
- ④ 鑑定処分許可状説は鑑定受託者に直接強制の権限がなく実効性を欠くから採らない
- ⑤ （連行）身柄不拘束なら令状の効力で採尿に適する最寄りの場所へ連行・必要最小限の有形力可（最決平6・9・16）

図：コア規範（逐語暗記）＋復元キーの規範カード。

- 【事例】 覚醒剤使用の嫌疑が濃厚な被疑者甲が、尿の任意提出を頑なに拒否した。捜査機関は甲の尿を証拠として確保するため強制採尿を行いたい。

- 【問題提起】 強制採尿は重大な人権侵害を伴うが、そもそも許されるか。許されるとして、いかなる令状によるべきか。

- 【あてはめ】覚醒剤使用という重大事件で嫌疑も濃厚、体内の尿は使用立証の決定的かつ重要な証拠で取得の必要性が高い。甲は任意提出を頑なに拒み、ほかに代替手段がない。よって真にやむを得ない最終手段として、身体の安全と人格保護に配慮する限り許容。令状は、尿を体内の証拠物と捉え、医師をして医学的に相当と認められる

方法により行わせる旨の条件を付した捜索差押許可状（条件付捜索差押許可状）による。なお身柄不拘束で任意同行が事実上不可能なら、令状の効力として採尿に適する最寄りの場所まで連行でき、必要最小限度の有形力も行使し得る（最決平6・9・16）。

答案の型（司法試験で使う型） | 強制採尿の可否と令状の種類

【事例】

覚醒剤使用の嫌疑が濃厚な被疑者甲が、尿の任意提出を頑なに拒否した。捜査機関は、甲の尿を証拠として確保するため、強制採尿を行いたいと考えている。

【問題提起】

強制採尿は、被疑者の意思に反して身体に侵入する重大な人権侵害を伴う。そもそも許されるか。許されるとして、いかなる令状によるべきか。

【規範】

上記の規範を定立（可否＝絶対禁止ではない・4考慮要素＋身体の安全と人格保護への配慮・真にやむを得ない最終手段→令状の種類＝尿は証拠物＝捜索・差押えの性質ゆえ条件付捜索差押許可状（218条9項）／鑑定処分許可状説は直接強制不可で実効性を欠く）。

【あてはめ】

本件は覚醒剤使用という重大な事件で嫌疑も濃厚であり、体内の尿は使用立証の決定的かつ重要な証拠で取得の必要性が高い。甲は任意提出を頑なに拒否し、ほかに代替手段がない。よって捜査上真にやむを得ない最終手段として、身体の安全と人格保護に配慮する限り許容される。令状は、尿を体内の証拠物と捉え、捜索・差押えの性質を有するものとして、医師をして医学的に相当と認められる方法により行わせる旨の条件を付した捜索差押許可状（条件付捜索差押許可状）による。なお身柄不拘束で任意同行が事実上不可能なら、令状の効力として採尿に適する最寄りの場所まで連行でき、必要最小限度の有形力も行使し得る（最決平6・9・16）。

図：事例→問題提起→規範→あてはめの答案の型カード。

今日の地図（保存版）

- 可否＝身体侵入・屈辱感を伴うが絶対禁止ではない。事件の重大性・嫌疑・証拠の重要性と必要性・代替手段の不存在に照らし、真にやむを得ない最終手段として、身体の安全と人格保護への配慮の下で許容（最決昭55・10・23）。
- 令状＝尿を体内の証拠物と捉え直す→性質は捜索・差押え。条件付捜索差押許可状（「医師をして医学的に相当と認められる方法により行わせる」旨の条件・218⑨）。
- 2つの目盛り＝性質（探す/見る/分析）×直接強制が届くか。条件付捜索差押許可状は

一枚で両方を満たす。

- 鑑定処分許可状説の弱点＝鑑定受託者（225④）は172条を準用せず139条が及ばない＝直接強制不可。身体検査令状は222①→139で届く。
- 連行＝身柄不拘束でも、令状の効力として採尿に適する最寄りの場所まで連行＋必要最小限度の有形力（逮捕状不要・最決平6・9・16）。

次回は第3章①「公訴提起」。国家訴追主義・起訴便宜主義（248条）、公訴権濫用論を扱います。